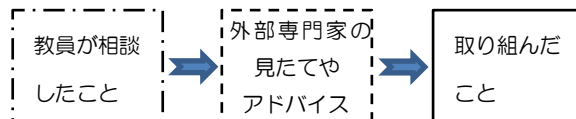


外部専門家連携だより

No.2

指導の充実に向けた外部専門家の活用

児童・生徒の学習場面や生活場面での様子を見ていただき、実態把握や指導内容や方法についての助言をいただく「観察型アセスメント」を実施しています。1学期は約60ケースをみていただきました。今回はその中から4ケースについてお知らせいたします。



<ケース1～小学部1年>外部専門家：助川文子先生（作業療法）

- ・運動時に周囲へ注意が散りやすい。
- ・リズム運動の大股歩きの際に足を踏み込めない。

- ・視覚情報に強いため、周辺視野に動くものが入ってくると反射的に動いてしまう。
- ・下半身の固有覚が未発達である。

- ・指示をするときは、対象児の身体の動きを止め、正面に立って指示をする。
- ・足で自分の重みを感じ取りやすいように教員が後ろから腰をつかみ、重力方向に負荷を掛けながら進むように支援する。

<ケース2～小学部5年>外部専門家：笹田哲先生（作業療法）

- ・歩行時に転びやすい。
- ・ランニングでスピードが始めるとつまずいて転んでしまうことがある。

- ・体が大きくなってきて、足の踏ん張りがきかなくなっている。
- ・歩き方を観察すると、足首の筋力が緩く弱い。

- ・足首の筋力をつけるため、座って片足ずつペットボトルをつぶす活動を取り入れた。ペットボトルがつぶれる感触や音を好んで取り組んでいる。
- ・日常生活動作をする中で、足首の筋力をつけていけるように、靴のベルトを外すときなどに、お尻を落としたしゃがみ姿勢で踏ん張るようにしていく。

<ケース3～中学部1年>外部専門家：今本繁先生（応用行動分析）

- ・休み時間、教室の中でいろんなものを探し回ってしまう。

- ・活動と場所を一対一対応することで、狭い教室を構造化してはどうか。

- ・教室の窓際を余暇スペースとしてマットを敷いて、物理的な構造化をすることで、安心して過ごすことができるようになった。

<ケース4～小学部1年>外部専門家：新田收先生（理学療法）

- ・体操やストレッチで手本を見て身体の御子に力を入れるのかなど、自分でわかるようにするにはどのような指導を積み上げていけばよいか。

- ・自分の中に運動のイメージがなく、自分の手足がどう動いているのかわかっていない。また、指示されていることが理解できていない。

- ・朝の体の取り組みだけでなく、体育の体操やダンス、他の教科の動作模倣でも、後ろからガイドし、言葉を添えて、一つ一つ動きを教えていくようにした。